

④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第34回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会（セ09）	文化遺産国際協力センター	69
平成22年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（美05）	企画情報部	70
伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（*修03）	保存修復科学センター	71
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修06）	保存修復科学センター	71
国際文化財保存修復研究会（*セ01）	文化遺産国際協力センター	72
総合研究会（情）	企画情報部	73
企画情報部研究会（情）	企画情報部	73
保存修復科学センター研究会（保）	保存修復科学センター	74

- *注
- ・ 伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①修03）の一環として実施した。
 - ・ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する研究（①修06）の一環として実施した。
 - ・ 国際文化財保存修復研究会は、文化財保存施策の国際的研究（②セ01）の一環として実施した。

第34回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「『復興』と文化遺産」(④セ09-10-1/1)

平成22年度は、「『復興』と文化遺産」をテーマとし、文化遺産国際協力センターが担当して、文化財の保存および修復に関する国際研究集会を開催した。本研究集会では、災害や紛争後の復興過程、あるいは政治体制や社会状況の変化といった様々な局面において文化遺産がどのように扱われ、その保存や修復にどのような意図が込められ、そこで文化遺産が社会に対してどのような役割を果たしてきたのか、といった文化遺産と社会とのかかわりについて、具体的な事例の分析を通じて改めて考察することを目的とした。

日 程：2011（平成23）年1月19日（水）～21日（金）

会 場：東京国立博物館平成館大講堂

参加者数：347名（3日間の延べ人数）

[基調講演]

ニコラス・スタンリープライス（前イクロム）「災害後の文化遺産復旧」

木下直之（東京大学）「人は文化遺産に何を求めてきたか」

[第1セッション] 災害からの復興（議長：奥村弘（神戸大学））

ルチアーノ・マルケッティ（ラクイラ文化遺産復興政府特命副総監、イタリア）

「アブルッツォ（ラクイラ）、マルケ、ウンブリア（アッシジ）：復興の過程」

侯衛東（中国文化遺産研究院）「遺産は災害とリスクに直面している：汶川から玉樹まで」

村上裕道（兵庫県教育委員会）「災害復旧と文化遺産を慈しむ社会—神戸大震災の経験を通して—」

[第2セッション] 紛争からの復興（議長：星野俊也（大阪大学））

アミール・フォラディ（アガ・カーン財団、アフガニスタン）

「アフガン人にとってのバーミヤーン保存活動の意義」

山内和也（東京文化財研究所）「バーミヤーンにおける文化遺産保存と国際貢献」

アムラ・ハジムハメドヴィッチ（ボスニア・ヘルツェゴビナ国家記念物保護委員会）

「千年紀の転換点におけるボスニアの遺産：戦後復興」

ライラ・ハジッチ（NGO「国境なき文化遺産」、ボスニア・ヘルツェゴビナ）

「国境なき文化遺産—西バルカン地域における修復・和解および再融合」

アン・チュリアン（王立芸術大学、カンボジア）「アンコール地域の無形遺産：バランス・ケアに向けて？」

[第3セッション] 社会変化の中での復興（議長：私市正年（上智大学））

ルドルフ・S・モルゲンシュテルン（ドレスデン工科大学名誉教授、ドイツ）

「異なる政治体制の狭間の文化遺産—ドイツの2つの歴史的教会を例に—」

ナタリア・デュシュキナ（モスクワ建築大学、ロシア）

「ロシアにおける歴史的再建—将来への戦略か、遺産概念の減損か？—」

ドルジ・ワンチュク（国立民俗遺産博物館、ブータン）「国策としての伝統文化保護継承」

清水真一（東京文化財研究所）「戦後日本の社会変化と文化遺産保護」

[総合討議] 「復興」と文化遺産、そして国際協力の課題

平成22年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-10-5/5）

第44回オープンレクチャー「人とモノの力学」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で44回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ200人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、136人から回答を得た（回収率：68%）。結果は、「たいへん満足した」55人、「おおむね満足した」59人、「普通だった」5人、「不満が残った」1人、回答者の83.2%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2010（平成22年）年10月15日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・津田徹英（東京文化財研究所）「中世における真宗祖師先徳彫像の制作をめぐる」

現存する等身の中世真宗祖師先徳の彫像は、もっぱら東国の真宗門徒によってつくられたものであり、一方で京都において先徳像の遺品は限られた数しか残されていない。こうした先徳彫像の制作における“東高西低”の傾向は、真宗に限られるものではないと思われる。本講座では、こうした“東高西低”の理由を探るとともに、本格的な先徳彫像の遺品である京都・佛光寺了源像が京洛に出現したことの意義と衝撃を解き明かした。

・須賀みほ（岡山大学）「草花の美—都久夫須麻神社社殿の空間—」

国宝都久夫須麻神社社殿は、天井を埋める草花、壁面に広がる木立のつくり出す内部空間を華やかな浮き彫りの戸壁が包み込む、まさに琵琶湖の中ほど竹生島に据えられた宝の小箱のような建造物である。本講座ではこの度詳細な調査ならびに撮影記録の機会を得たこの社殿につき、精細な画像資料を用いてその造形美を紹介するとともに、襖絵の空間構成について、絵巻等小画面の画面形式との関連を含め考察した。

第2日：2010（平成22）年10月16日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・高橋利郎（成田山書道美術館学芸員）「御歌所の歌人と書」

明治21年、宮内省に御歌所が開設された。ここに集まった歌人たちは、和歌のみならず書の重要な担い手でもあった。平安文学とともに平安古筆を尊重する姿勢は、近代天皇制を背景に醸成された面も大きい。近代文学史の上で重視されることは少ないが、宮廷文化の再生産と啓蒙という点で彼らは重要な役割を果たした。本講座では、和歌、書、教育、さらには茶の湯など様々な場面で活躍した彼らの活動の意味を、特に書に注目しながら考察した。

・塩谷純「秋元洒汀と明治の日本画」

明治期の日本画をリードした菱田春草の《落葉》や《黒き猫》は、近代日本美術の名作として親しまれている。しかしパトロンとして晩年の春草を支え、それらの作品を所蔵していた秋元洒汀という人物を知る人は少ないのではないだろうか。流山の醸造家だった洒汀は当時の文学界・美術界に通じ、寺崎廣業や横山大観ら新進日本画家の作品を収集した。本講座では、洒汀の営みを通じて、明治期文芸の支援者の姿を浮かび上がらせた。

伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（①修03-10-5/5の一部として実施）

平成22年度は、各種伝統的な修復材料のうち、絵画資料のみならず建造物の塗装彩色材料としても広く使用されてきた「膠」に関する現状と課題を主なテーマとして取り上げた研究会を開催した。「膠」は日本のみならず西洋でも広く昔から使用されてきた汎用性が高い接着材料として知られている。ところが、近年、日本国内においては伝統的な膠生産を行う工場が少なくなっており、今後、良質な和膠の安定的な供給が望めない可能性も出てきた。このような背景を踏まえて、今回、まずは膠(1)として、膠とはどのような素材であるのか、とりわけ和紙を用いた絵画修復を行う装こうの分野ではどのような膠の使い方を行うのか、さらには伝統的な和膠生産の現状と課題などについて、研究会を行った。研究会では、それぞれの立場で現在取り組んでいる講師を招き、東京文化財研究所の地下会議室において関連する方々にご参加いただいた。

第4回「膠(1)」

日 時：2010（平成22）年6月21日（月）13：30～17：30

会 場：東京文化財研究所会議室（地下1階）

講演者：早川典子（東京文化財研究所）「修復材料としての膠の物性」

山本記子（国宝修理装こう師連盟）「装こうにおける膠の使い方」

関出（東京藝術大学）「膠に関する雑感」

森田恒之（愛知県立芸術大学客員教授・国立民族学博物館名誉教授

・総合研究大学院大学名誉教授）「膠の生産の現状と課題」

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（①修06-10-5/5の一部として実施）

平成22年度は、近代文化遺産の中でも音声・映像記録メディアの保存と修復を主なテーマとして研究を行った。国内において重要文化財に指定された映画フィルム2本を含む多数の映画フィルムの保存と修復・活用に実際に携わっておられる方、また、大阪において、映像記録メディアとしてほんの数分の記録時間しか無いトイフィルムと呼ばれる映画フィルムの保存と修復、さらには一般向けのワークショップまで開催されている方、さらにドイツから自身写真家であり、大学で写真やフィルム等の保存と修復を教えておられる方も招いて、東京文化財研究所の地下セミナー室において、音声・映像記録メディアの研究者の方々にご参加いただき、各研究者の視点から音声・映像記録メディアの保存と修復に関する研究会を行った。

第24回「音声・映像記録メディアの保存と修復について」

日 時：2011（平成23）年1月14日（金）10：00～17：20

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講演者：中山俊介（東京文化財研究所）「音声・映像記録メディアの保存と修復」

岡部幹彦（文化庁文化財部美術学芸課）「映像資料保護の現状と課題」

とちぎあきら（東京国立近代美術館フィルムセンター）

「日本の最初期トーキー映画のアーカイビング」

太田米男（大阪芸術大学映像学科）「玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト」

坂本通夫（ログオーディオ（株））「レコード音源の修復と保存」

松尾和彦（セルロイドハウス横浜館）「音声／映像メディア媒体としてのセルロイド」

カースティン・パーテルス（ベルリン産業技術大学）

「Research and Projects for Audiovisual and Photographic Heritage」

国際文化財保存修復研究会（②セ01-10-5/5の一環として実施）

目 的

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人々の接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる国や地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、国際文化財保存修復研究会を開催し、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる情報交換の場を提供している。

成 果

平成22年度は、以下のとおり研究会を実施し、またその報告書を出版した。

テ ー マ：覆屋保存を考える

趣 旨：遺跡の保存を目的としてそこに覆屋が設けられることがあるが、そのメリット・デメリットを理解するためには、既に造られてからある程度の年数が経過した覆屋について、その後の状況を知る必要がある。本研究会では、そうした実例について、その後の遺跡の保存状態を議論することから、遺跡保存のための覆屋のあり方に関して議論を行う機会とした。

日 時：2010（平成22）年7月8日（木）10：30～17：00

会 場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：71人

講演内容：アナト・バムルンウォンサ（タイ芸術局）

「ブラーチンブリー県の二つ一組の仏足跡の覆屋：その問題と解決への指針」

入佐友一郎（福岡県文化財保護課）「福岡県における覆屋の諸形態と現状」

シン・ウンジョン（韓国国立文化財研究所）「韓国の石造文化財における覆屋の現状と事例研究」

報告書出版 1冊：『第24回国際文化財保存修復研究会報告書』 10.12

総合研究会（④情）

総合研究会は各部・センターの研究員が各自、テーマを設定し、研究プロジェクトの成果を発表し、それに対して所内の研究者が自由討論する研究会である。総合研究会の開催は企画情報部が担当する。平成19年度より独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知している。平成22年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。

- ・第1回 2010（平成22）年7月6日（火）
早川典子（保存修復科学センター）「修復材料に関する近年の動向」
- ・第2回 2010（平成22）年10月5日（火）
佐野千絵・早川泰弘・吉田直人（保存修復科学センター）「高松塚古墳壁画の材料調査」
- ・第3回 2010（平成22）年11月2日（火）
山梨絵美子（企画情報部）「東アジア近代美術史への一視点」
- ・第4回 2010（平成22）年12月7日（火）
朽津信明（文化遺産国際協力センター）「覆屋の歴史とその効果について」
- ・第5回 2011（平成23）年1月11日（火）
宮田繁幸（無形文化遺産部）「無形文化遺産保護条約と日本」
- ・第6回 2011（平成23）年2月1日（火）
塩谷純（企画情報部）「秋元酒汀と明治の日本画・外伝—文化財アーカイブの見地から」

企画情報部研究会（④情）

企画情報部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成22年度は下記のような研究会が行われた。

- 4月28日（水）田中淳「『後期印象派・考』について」
- 5月19日（水）山梨絵美子「『黒田清輝と西洋文学』補遺—ド・ラマルティヌ『湖』と《湖畔》をめぐって」
- 6月23日（水）皿井舞「神護寺薬師如来立像にかかわる諸問題」
- 7月28日（水）江村知子「鈴木其一の草花図について—
ポートランド美術館所蔵・鈴木其一笔四季草花図小襖を中心に」
真田尊光（足立区立郷土博物館）「千住と江戸琳派」
コメンテーター：玉蟲敏子（武蔵野美術大学）
- 9月29日（水）土屋貴裕「『是害房絵』成立の周辺」
- 11月24日（水）津田徹英「岩手・光林寺所蔵 木造聖徳太子立像をめぐって」
皿井舞「作品紹介 京都・神光院地藏菩薩立像」
- 12月17日（金）皿井舞「平安初期神仏習合彫刻史試論」
佐々木守俊（町田市立国際版画美術館）「“北宋風作善”の受容と印仏・摺仏の像内納入」
- 1月29日（土）近世風俗画共同研究調査報告会「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」を中心に
江村知子「歌舞伎図巻の描写について」
吉川美穂（徳川美術館）「本多平八郎姿絵屏風の表現について」
質疑応答 司会：四辻秀紀（徳川美術館）、コメンテーター：中村佳史（国立情報学部研

④研究集会・講座等

究所)

2月27日(日)『美術研究』四〇〇号・『美術史論壇』三〇号記念日韓共同シンポジウム

「人とモノの力学—美術史における『評価』」

洪善杓(韓国美術研究所・梨花女子大学校)基調講演

「国史形美術史の栄辱—朝鮮後期絵画の解釈と評価の問題」

綿田稔「山水長巻考—雪舟の再評価にむけて」

張辰城(ソウル大学校)「愛情の誤謬—鄭敬への評価と叙述」

江村知子「江戸時代初期風俗画の表現世界」

文貞姫(韓国美術研究所)「石濤、近代の個性という評価の視線」

ディスカッション 司会:田中淳・相澤正彦(成城大学)

3月12日(土)『美術史論壇』三〇号・『美術研究』四〇〇号記念

韓国美術研究所・東京文化財研究所共同シンポジウム「視線の「力学」—美術史における『評価』」

田中淳 基調講演「創作と評価—萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に」

綿田稔「山水長巻考—雪舟の再評価にむけて」

張辰城(ソウル大学校)「愛情の誤謬—鄭敬への評価と叙述」

江村知子「江戸時代初期風俗画の表現世界」

文貞姫(韓国美術研究所)「石濤、近代の個性という評価の視線」

ディスカッション 司会:鄭于澤(東国大学校)

保存修復科学センター研究会(④保)

(1)「文化財の保存環境の研究—環境モニタリングの結果から—」

日 程:2010(平成22)年4月15日(木)14:00~15:30

会 場:東京文化財研究所地下会議室、参加者:33名

講演者:エリン・ダーリン(ノルウェー大気研究所)「博物館環境—環境モニタリングの結果から—」

(2)「文化財の保存と活用に関する研究会—ガス燻蒸剤の現状と今後—」

日 程:2010(平成22)年10月19日(火)13:20~17:20

会 場:九州国立博物館、参加者:126名

講演者:朝賀浩(文化庁美術学芸課文化財管理指導官)「展覧会に伴う借用品の管理について」

三浦定俊((財)文化財虫害研究所理事長)「文化財虫害研究所の認定薬剤について」

佐野千絵(東京文化財研究所)「ガス燻蒸剤の特性と文化財影響」

本田光子(九州国立博物館)

「博物館等における使用の実際—IPM(総合的有害生物管理)の一環として—」

(3)「日光の歴史的建造物における昆虫調査・劣化調査等結果報告会」

日 程:2011(平成23)年1月27日(木)

会 場:(財)日光社寺文化財保存会、参加者:40名

講演者:原田正彦((財)日光社寺文化財保存会)

「日光の歴史的建造物を対象とした捕虫テープによる広域害虫調査について」

林美木子(東京文化財研究所)

「日光の建造物において粘着トラップに捕獲された甲虫の集計方法と調査結果」

小峰幸夫((公財)文化財虫害研究所・東京文化財研究所客員研究員)

「日光の建造物で確認された木材害虫（シバンムシ類）の種類と生態」
藤井義久（京都大学・東京文化財研究所客員研究員）、藤原裕子（京都大学）

原田正彦（(財)日光社寺文化財保存会）

「輪王寺三仏堂の主要構造部材に見られる虫害の調査結果と今後の展望」
鳥越俊行（九州国立博物館）

「X線CTによる部材内部の虫害の調査と害虫の活動の有無の調査」
木川りか（東京文化財研究所）「修理に伴う処置法の検討、および今後の対策について」

(4) 「文化財の保存環境の研究—文化財施設の環境解析と博物館の省エネ化—」

日 程：2011（平成23）年2月25日（金）13：30～17：30

会 場：東京文化財研究所セミナー室、参加者：50名

講演者：ジョン・グルネワルド（ドレスデン工科大学）

「ドイツにおける建物の省エネルギー化と環境解析技術」
菅野元衛、矢川明弘、太田昭彦（清水建設株式会社）

「文化財施設内の環境解析のための気流シミュレーション技術と応用事例」
ルドルフ・ブラーグ（ドレスデン工科大学）「環境解析に関わる建材の物性測定法」